様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25　年　6　月　7　日現在

機関番号：１２６０５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520523
研究課題名（和文）多言語多文化キャンパスで必要なリテラシー能力に関する調査・研究

研究課題名（英文）Literacies necessary for multilingual and multicultural campus

研究代表者
田崎　敦子（TASAKI ATSUKO）
東京農工大学・国際センター・准教授
研究者番号：10272642

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語能力の低い、または皆無の留学生の増加に伴い、日本人学生と留学生の共通言語が日本語と英語となりつつある日本の大学において、留学生が日本人学生と円滑にコミュニケーションを進め共に学習・研究を遂行するために必要なジャパン・リテラシー（日本語の言語能力、社会文化能力、社会言語能力）を彼らの使用言語、及び日本語のレベル別に明らかにした。次に、それらの能力を養成するために必要な日本語教育について検討し、教育内容・方法を提案した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to obtain suggestions related to Japanese language teaching in order to promote communication between Japanese and international students whose levels of proficiency in the Japanese language are different. The availability of English and Japanese in campuses is necessary owing to the increase in the number of international students who are not well-versed in Japanese. For this purpose, this paper proposes “Japan literacies” (based on Japanese language skills, sociocultural skills, sociolinguistic skills) for international students who can utilize them depending on whether their main language is Japanese or English, and their levels of proficiency in Japanese. Then, we implemented instruction through a Japanese language class to improve the Japan literacies among international students so that they can communicate with their Japanese counterparts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：異文化理解・異文化コミュニケーション・社会文化能力・社会言語能力・日本語教育・実践研究・短期留学

１．研究開始当初の背景

近年、日本の大学では学習や研究を英語で行う留学生が増えている。その留学期間は数ヶ月から学位取得を目的とした数年に及ぶものまで様々である。彼らは日本語能力が非常に限られている、または皆無の場合が多い

ため、こうした留学生数の増加に伴いキャンパスにおける日本人学生と留学生の共通言語が日本語と英語になりつつある。このような状況の中で、使用言語や留学期間にかかわらず留学生の誰もが大学コミュニティーに参画し、仲間と共に学習や研究を進められるようになるためには、彼らのニーズに合わせたコミュニケーション教育が必要となる。

こうした教育を考える際、ネウストプニー(1994)の「リテラシー」の捉え方が参考になる。ネウストプニーは「リテラシー」を「何かを理解し、その理解を行動のために使いうる」と捉え、外国人が日本人と円滑にコミュニケーションを行うために必要な能力を「ジャパン・リテラシー」として示した。ジャパン・リテラシーには、日本語能力、社会文化能力（場面ごとに求められる日本人の行動パターン）、社会言語能力（文法以外のコミュニケーションのルール）が含まれ、この3つの能力は外国人が日本人とどのように接触するかにより重視される度合いが異なるという。例えば、主に英語を使用する場合は、日本語の言語能力よりも社会文化能力や社会言語能力を理解し実行できることが重要で、ネウストプニー(1994)はその能力を養成するのも日本語教育の範疇だと述べている。

外国人の立場やニーズに合わせて求められるジャパン・リテラシーは、日本語能力が多様化した留学生にも適用可能である。しかし、これまで留学生に必要な能力をこうした観点から捉え、その能力を養成するための研究はほとんど行われていない。そのため、共通言語が日本語と英語となったキャンパスにおいて留学生のニーズに合った日本語教育が提供されているとは言い難い。

２．研究の目的

本研究は、留学生が使用言語や滞在期間にかかわらず仲間と共に学習や研究を行い、大学コミュニティーに参画できる「多言語多文化キャンパス」の構築のために、留学生に必要なジャパン・リテラシーを彼らの主要言語（留学生が大学の学習・研究、また友人とのコミュニケーションで主に使用する言語。本研究の場合は、英語か日本語）と日本語能力別に明らかにし、それらを養成するための日本語教育への示唆を得ることを目的とする。

３．研究の方法

まず、ジャパン・リテラシーに関する調査を、約3ヶ月間研究室に滞在し英語で研究活動を行った留学生（日本語能力皆無）、英語で学位取得を目指す留学生（大学院入学後日本語学習開始、日本語初級レベル）、日本語で学位取得を目指す留学生（日本語上級以上）を対象に、留学生に対するインタビュー、日本人学生とのコミュニケーション場面の分析、留学生間の話し合いの分析を通して行った。留学生はいずれも大学院生とした。次に、調査結果から明らかになった能力を養成するための教育内容・方法を検討し、それをもとに実践研究を行った。

４．研究成果

(1) 留学生に必要なジャパン・リテラシー

①　3ヶ月間滞在の留学生

調査の結果、約3ヶ月間研究室に所属し英語で研究を行った留学生が日本人学生と最も交流を深めた活動として、研究室の学生全員で行う「研究室の掃除」と「飲み会」という研究と直接関連しないものが挙げられた。そして、そこに参加し日本人学生と良好な関係を構築するためには、協力的に作業を進める上で日本人学生が共有している規範を理解し、それに従って行動できる社会文化能力が重要であることがわかった。

また、たとえ英語を使用していても、日本語の社会言語面の規範に沿って挨拶や依頼を行うことや、謝罪や感謝の意を示すことが日本人学生とのコミュニケーションや関係構築に影響することがわかり、これらが彼らに求められる社会言語能力として示された。

②　英語で学位取得を目指す留学生

英語で学位取得を目指す留学生にも上記の社会文化能力、社会言語能力の重要性が認められた。これらの能力に加え、大学院入学後に日本語学習を始め、初級レベルの能力を持つ彼らは、日本人学生と研究以外の会話、つまり雑談ができる日本語能力の必要性を感じていることがわかった。日本人学生は英語では多くを話さず、会話が発展しないという。このことから、留学生が日本人学生と同じ研究室の仲間としての関係を構築するためには、場面にあった雑談の話題を選択できる社会言語能力や、限られた日本語能力でその話題を発展させることができる日本語能力が求められることが示唆された。

こうした能力をより具体的に把握するために、留学生と日本人学生とのコミュニケーションを言語の社会的機能に注目したバフチン(1996)の言語論をもとに分析した。その結果、留学生と日本人学生が積極的な応答(質問、言い換え、支持、など)を頻繁に使用し、互いに考えを深めて行くことで、自分たちのコミュニティーに存在する事象の共有、事象の意味づけ、認識の変容や発展などが観察され、たとえ初級レベルの日本語であっても同じコミュニティーの成員としての関係構築につながるコミュニケーションが可能であることがわかった。また、やりとりを発展させるためには、留学生が自ら話題を切り出すことや、日本人学生と共有できる身近な事象を日本語で表現できることなどが有効であることも示された(発表論文(1)、学会発

表(6))。
③　日本語で学位取得を目指す留学生
　日本語上級レベルの留学生からは、依頼や誘いに対する断りなどの人間関係に関わるやりとりの遂行、及び日本人学生と共に考えを深めることや、何かを決めることが求められるグループディスカッションへの参加がコミュニケーションの困難点として挙げられた。特に、ディスカッションでは、日本人学生の意見や話し合いの流れがわかりにくいことが指摘された。

(2) 日本語教育への示唆
①　3ヶ月間滞在の留学生に対する教育
　彼らには、上記の能力の養成を中心とした日本語教育を滞在中に定期的に設定することが望ましい。また、今回行ったインタビュー調査では留学生が自分たちの経験を振り返り、その意味を内省する場面が観察された。このことから、彼らに対する教育では、留学生間で研究室での経験を共有しつつ、自分たちに必要なジャパン・リテラシーについて気づきを高めることができる活動を取り入れることも効果的だと考える。
②　初級レベルの教育（主要言語：英語）
　英語で学位取得を目指す留学生には、3ヶ月滞在の留学生に求められた社会文化能力、社会言語能力に加え、特に雑談場面で適切な話題を選択できる、その関連する事象を日本語で表現できる、日本人学生と相互行為的に話題を発展させることができる能力が重要であることがわかった。
　日本語学習開始と同時に大学院生として日本人学生と研究を始める彼らには、こうした能力を初級の早い段階から養成する必要がある。そこで、本研究では、そのための教室活動を複数デザインし、初級日本語クラスで段階的、かつ定期的に実施し、留学生のフィードバックや担当者の振り返りをもとに改善を繰り返す実践研究を行った(発表論文(3)、学会発表(4))。その結果、一連の活動を、英語を主要言語とする大学院留学生のニーズや、彼らの日本語能力の向上に合わせて行う教室活動として体系化することができた(発表論文(4)、学会発表(2))。
　留学生が英語や限られた能力の日本語を駆使して日本人学生とコミュニケーションを遂行するためには、留学生だけでなく、日本人学生も母語話者同士とは異なるコミュニケーションの進め方を学ぶ必要がある(発表論文(5)(6)，学会発表(8))。そこで、本研究では、ジャパン・リテラシーの調査結果や実践研究の結果をもとに、日本語初級レベルの留学生と日本人学生を対象とした異文化コミュニケーション教育で行う活動も提案した(学会発表(5))。
③　上級レベルの教育（主要言語：日本語）
　日本語で研究を行う留学生に求められた人間関係に関わるやりとりの遂行や、グループディスカッションへの参加を円滑にする日本語能力、社会言語能力を養成するためには、留学生の困難の要因を具体的に把握する必要がある。そこで、留学生と日本人学生のコミュニケーションの比較・分析を行った。「人間関係に関わるやりとり」としては、「誘いに対する断り場面」を取り上げ、日本人学生同士のやりとりと、日本人学生と留学生のやりとりを比較・分析した。その結果、断りが遂行された後の人間関係維持のためのやりとりに大きな相違が見られた。日本語能力が上級レベルの留学生であっても、そのやりとりをうまく発展させることができず日本人学生に関係維持の意図が伝わりにくいことが明らかになった(発表論文(2)、学会発表(3))。
　グループディスカッションの分析では、日本人学生の間に、意見を明示せず情報のみを出し続ける、反対意見を明確にしない、話し合いの内容をまとめることを重視する、などの言語行動が特徴的に見られ、こうした点が日本人学生の意見がわかりにくい、話し合いの流れが理解しにくいという留学生の困難の要因になっている可能性が示唆された(学会発表(1))。
　これらの結果を踏まえと、上級レベルの留学生に対する日本語教育では、上記のような日本人学生のコミュニケーションの特徴を認識した上で、自らのコミュニケーションを調整できる能力を養成することが求められる。また、日本人学生と留学生が共に学び合う多言語多文化キャンパスを構築するためには、留学生だけでなく、日本人学生にもそうした調整能力が求められる。それは、たとえ相手の留学生の日本語が上級レベルであっても必要であることが今回の調査結果から示された。その能力養成のためには、日本人学生が日本語で異文化コミュニケーションを遂行する必要性を踏まえた教育を大学院レベルで行う必要がある。

(3) まとめ
　本研究では、日本人学生と留学生の共通言語が日本語と英語となった多言語多文化キャンパスにおいて、留学生に必要なジャパン・リテラシーを具体的に示し、その能力養成のための教育への示唆を得た。この研究成果をもとに、英語を主要言語とする留学生に対する日本語教育の必要性、重要性も実証してきた(発表論文(5)(6)，学会発表(7))。彼らに対する日本語教育は、従来のように日本語のみでコミュニケ-ションを遂行することを目的とするのではなく、留学生の現実的なニーズを考慮し、英語との二言語使用も視野に入れる必要があると考える。今後、二言語

使用の観点から行う教育に関してさらに研究を深める必要がある。また、本研究では、日本人学生に対する異文化コミュニケーション教育についても、その必要性を示し具体的な教育内容を提案した。日本語教育の研究成果を日本人学生に対する教育に還元し、さらなる充実を図ることも今後の課題である。

引用文献：
ネウストプニー，J.V.(1994)『新しい日本語教育のために』大修館書店
バフチン，M.(1996)『小説の言葉』(伊東一郎訳) 平凡社ライブラリー

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
(1) 田崎敦子(2012)「関係構築につながる日本語母語話者と非母語話者の対話－言語の社会的機能に注目して－」『小出記念日本語教育論集』査読有，20 号，63-76.
(2) 周依丹・田崎敦子(2012)「中国人日本語学習者の誘いに対する断り談話－関係構築に着目して－」『日本語教育と日本学研究』査読有，84-88.
(3) 田崎敦子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝 (2012)「初級日本語クラスにおける上級学習者との会話実習－相互行為を通して会話を構築する能力の養成を目指して－」『多摩留学生教育研究論集』査読有，第６号，25-30.
(4) 田崎敦子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝 (2012)「初級日本語クラスにおける会話活動の体系化のプロセス ―実践と研究の連携を通して―」2012 年 WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』査読有，http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2012forum/2012_P16_tasaki.pdf
(5) 田崎敦子(2011)「英語で研究活動を行う大学院における日本語教育の位置づけと方向性－理工系の留学生を対象として－」『留学交流』査読なし，Vol.23，No.3，2-5.
(6) 田崎敦子・越前谷明子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝(2010)「理工系大学院における日本語教育プログラムの成果と課題－英語で研究活動を行う留学生を対象に－」『多摩留学生教育研究論集』査読有，第５号，23-29.

〔学会発表〕（計８件）
(1) 周郭・田崎敦子「小集団討論における言語行動に関する中日比較―討論の進め方に着目して―」中国日語教学研究会，2013 年５月 25 日，同済大学，中国・上海.
(2) 田崎敦子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝「実践と研究の連携による会話活動の体系化―母語話者と会話を構築するための能力の養成を目指して―」日本語教育学会実践研究フォーラム，2012 年７月 28 日、早稲田大学.
(3) 周依丹・田崎敦子「関係維持の観点から見た中国人日本語学習者の誘いに対する断り談話－日本語母語話者との比較から－」中国日語教学研究会，2012 年６月９日，同済大学，中国・上海.
(4) 上原真知子・田崎敦子・中川和枝・小熊貞子「初級前半のクラスにおける会話活動「トピック J1」－日常生活に関する話題を発展させるために－」日本語教育方法研究会，2012 年３月 10 日，国際基督教大学.
(5) 田崎敦子「日英二言語使用によるコミュニケーション促進のための授業－日本人学生と留学生の相互行為を引き出す翻訳作業を通して－」異文化間教育学会，2011 年６月 10 日，お茶の水女子大学.
(6) 田崎敦子「日本語母語話者と非母語話者による小集団の話し合いの談話構造－発話交換構造を枠組みとて－」社会言語科学会，2010 年９月３日，大阪大学.
(7) 田崎敦子「大学院教育における初級日本語クラスの位置づけと方向性－研究活動の支援を目的として－」日本語教育学会，2010 年７月 31 日，台湾国立政治大学.
(8) 田崎敦子「英語で研究活動を行う大学院における異文化間教育の必要性－日本語教育との連携から－」異文化間教育学会，2010 年６月 13 日，奈良教育大学.

６．研究組織
(1)研究代表者
田崎　敦子（TASAKI ATSUKO）
東京農工大学・国際センター・准教授
研究者番号：10272642

(2)研究分担者　　なし

(3)連携研究者
渡邊裕純（WATANABE　HIROZUMI）
東京農工大学・大学院農学研究院・教授
研究者番号：80323757
ポンサトーン・ラクシンチャラーンサク（PONGSATHORN RAKSINCHAROENSAK）
東京農工大学・大学院工学研究院・准教授
研究者番号：30397012
小熊貞子（OGUMA TEIKO）
東京農工大学・国際センター・非常勤講師
研究者番号：70401453